

9月に入り学校の新学期が始まる時期になると、フランスの文化事業も一斉に始動し始めます。パリ日本文化会館も例外ではなく、8月の夏季閉館を挟んで映画、展覧会、公演など各種事業が開催されました。本号では、それら主要事業についてご報告致します。また、9月26日に逝去されたシラク元フランス大統領の当館との関わりと思い出についてもご報告させていただきます。

目次

1. 映画「濱口竜介監督特集」 2

2018年カンヌ映画祭に出品された「ASAKO I & II」により一躍フランスで注目され始めた濱口竜介監督のフランス初の回顧上映特集を実施。代表作20作品を紹介しました。9月5日(木)から10月5日(土)まで(於大ホール)と11月6日(水)から11月16日(土)まで(於小ホール)開催。

2. 展覧会「トランスフィア#6 大岩オスカル リオ、東京、パリ: 都市とスポーツの祭典 田中麻記子、カミーユ・フォンテーヌとともに」展 3-4

現代アーティストシリーズ「トランスフィア」の第6弾として、スポーツの祭典に縁のある3都市をテーマに、ブラジル生まれの日系アーティストである大岩オスカル氏ほか日仏2人の画家による展覧会を9月18日(水)から12月14日(土)まで開催中です。

3. 講演「ユートピアについての対話」(新宮晋 x ヤニック・ルワワル) 5-6

シャンボール城で2019年10月6日(日)から2020年3月15日(日)まで開催される「新宮晋 ユートピア展」を記念した講演会を9月20日(金)に同城との共催で実施しました。

4. 公演「阿波人形浄瑠璃」 7

徳島県が誇る日本の重要無形民俗文化財「阿波人形浄瑠璃」の公演会を本願寺文化興隆財団との共催で9月24日(火)に実施しました。

5. 公演「鑢仙会 2019 欧州能ツアー 能・狂言公演」 8

9月24日(火)と25日(水)に「鑢仙会 2019 欧州能ツアー」の一環として、中東紛争や原爆の悲劇をテーマにした平和を訴える新作能を観世鑢之丞さんが代表を務める鑢仙会が演じました。

6. RATP の「ラグビーステーション」事業に協力 9

パリ地下鉄等を運営しているパリ交通公団(RATP)が、日本で開かれているラグビー・ワールドカップを盛り上げるために開催した事業「ラグビーステーション」にて、9月下旬から10月初旬にビルアケム駅やサンラザール駅で行われた太鼓や折り紙、書道など日本文化紹介事業を支援しました。

7. シラク元フランス共和国大統領の思い出 10-11

パリ日本文化会館とかかわりの深かった日本通のジャック・シラク元フランス共和国大統領が9月26日に逝去されました。シラク大統領の思い出と9月30日(月)に執り行われた国葬についてのご報告。

① 映画「濱口竜介監督特集」

パリ日本文化会館では9月5日(木)から10月5日(土)まで(於大ホール)と11月6日(水)から11月16日(土)まで(於小ホール)の2回にわたり、濱口竜介監督のフランス初の回顧特集を実施します。8mmで撮影された学生時代の処女作「Like nothing happened」(2003)など20作品を紹介します。同監督は2018年カンヌ映画祭に出品された「ASAKO I & II」により一躍フランスで注目され始めました。

9月7日(土)、濱口監督は「Like nothing happened」の上映後に行われた「マスタークラス」で自身の映画製作におけるこだわりを次のように述べました。

「『Like nothing happened』は学生時代の卒業制作作品で技術的には画像が粗く、お見せするのは恥ずかしい限りなのですが、私が映画を通じて表現したいことが凝縮されていて、いまでもその延長線上で映画制作をしています。特に私は人間の顔に興味を抱いていました。同映画は「何食わぬ顔」をした松井という一年先輩との出会いが大きな制作動機となりました。彼の顔が気に入って撮ったようなところがあります。彼の顔を見て反応する周りの人々の表情が面白いですし、考えていることと言っていることが必ずしも同じではないということも表現したかったわけです。私も同映画に出演していますが、他の役者たちが皆プロではなかったので、私がせりふを多くしゃべり、リードする形をとっています。あれから大分太ってしまいましたが、映画に出ているのは私です。最近では顔とともに声にも興味をもって製作しています。「ASAKO」を演じた唐田えりかは機械的表情をしているとも言われましたが、彼女の表情や声には微細なニュアンスが感じられます。」



終演後のマスタークラスで自作映画の哲学を語る濱口竜介監督

筆者は今年1月にパリ市内の映画館で公開された「ASAKO I & II」を見ました。同映画は解説なしでもその魅力がわかり、十分楽しめましたが、「Like nothing happened」については、濱口監督の同映画に込めた思いを聞いてはじめて、映画の見所を理解することができました。ある種の映画鑑賞には解説が必要なことを実感した次第です。

② 展覧会「トランスフィア#6 大岩オスカル リオ、東京、パリ: 都市とスポーツの祭典 田中麻記子、カミーユ・フォンテーヌとともに」展

2019年9月18日(水)から12月14日(土)までパリ日本文化会館展示ホールで「トランスフィア#6 大岩オスカル リオ、東京、パリ: 都市とスポーツの祭典 田中麻記子、カミーユ・フォンテーヌとともに」展が開催されています。

本展は現代アーティストシリーズ「トランスフィア」の第6回目の展覧会で、1965年にブラジルで日本人の両親のもとに生まれ、1991年に東京に移住し、2002年にはニューヨークに引っ越した大岩オスカルさんが、オリンピックに縁の深いリオ、東京、パリの3都市から着想を得てスポーツと芸術という境界、3大都市をまたぐ時間的、空間的境界を越えて描いた作品を展覧するものです。中心となるのはマーカーペンとチャコールで描き下ろした縦3m×横6.7mの大作3点を絵巻物のように横に並べた作品です。

大岩さんのほかに田中麻記子さんという東京生まれでパリ在住のアーティストとカミーユ・フォンテーヌさんというフランスのプロウ生まれでパリ在住のアーティストも、それぞれ特徴ある技法で描いたスポーツにちなんだ作品を出品しています。

大岩さんはデジタルを使って制作する風潮が主流になってきたアート界にあって、自らの手による制作にこだわった作品を発表し続けています。

今回の大作はリオ、東京、パリの情景を描くとともに、巻きものの絵のように右から左へと上記3都市のメルクマールが連続して描かれるとともに、パリ、東京、リオと下から縦に並べるとオリンピアの神ゼウスの顔が現れ、さらには3都市の風景が有機的につながるような仕掛けがなされています。その仕掛けは本展に出品されている準備のためのスケッチを見ると解き明かされます。その意味では16世紀にイタリアのミラノで生まれ、ウィーンで宮廷画家として活躍したジュゼッペ・アルチンボルド(1526-1593)の絵のような遊び心のある作品と言えます。



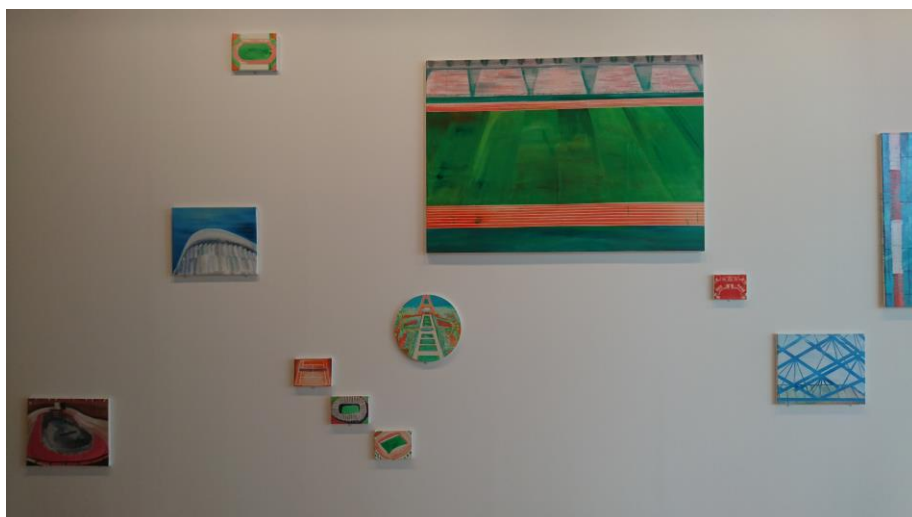
新作「オリンピアの神ゼウス」三部作中の「パリ」を背にした大岩オスカルさん

それら3点の大作とは打って変わって3都市の日常的情景を描いた油彩画小品はリオのスラム街にあるサッカー場や、テレビ観戦できるパン屋さん、東京下町の家やボクシング場、パリのエッフェル塔に重なるように描かれた巨大な雄鶏やフランスのケーキ類、サッカーワールドカップで優勝した際の熱狂と歓喜をあらわす路上の煙など、大岩オスカルさんが目にした身近なものが色彩豊かに描かれています。

なお、一般公開に先立つ9月17日(火)にプレスおよび招待客向けのオープニングと大岩オスカルさんと美術史家のジェルマン・ヴィアットさんによる対談が行われました。



田中麻記子さんの作品コーナー（上部にある作品はオリンピックの歴史を辿るもの）



カミーユ・フォンテーヌさんの作品コーナー（各種目の競技場がパリの地理的位置に配置されています）

③ 講演「ユートピアについての対話」(新宮晋×ヤニック・メルコワール)

今年はレオナルド・ダビンチが亡くなってから 500 年になります。6 月にはダビンチが最晩年を過ごしたクロ・リュセの館で、フランソワ 1 世がローマ教皇に献上した「最後の晩餐」のタピストリー（縦 5m×横 9m、法王庁所蔵）の特別里帰り展が開催されました。



ロワール地方クロ・リュセ城で特別展示された「最後の晩餐」のタピストリー（ローマ法王庁所蔵）

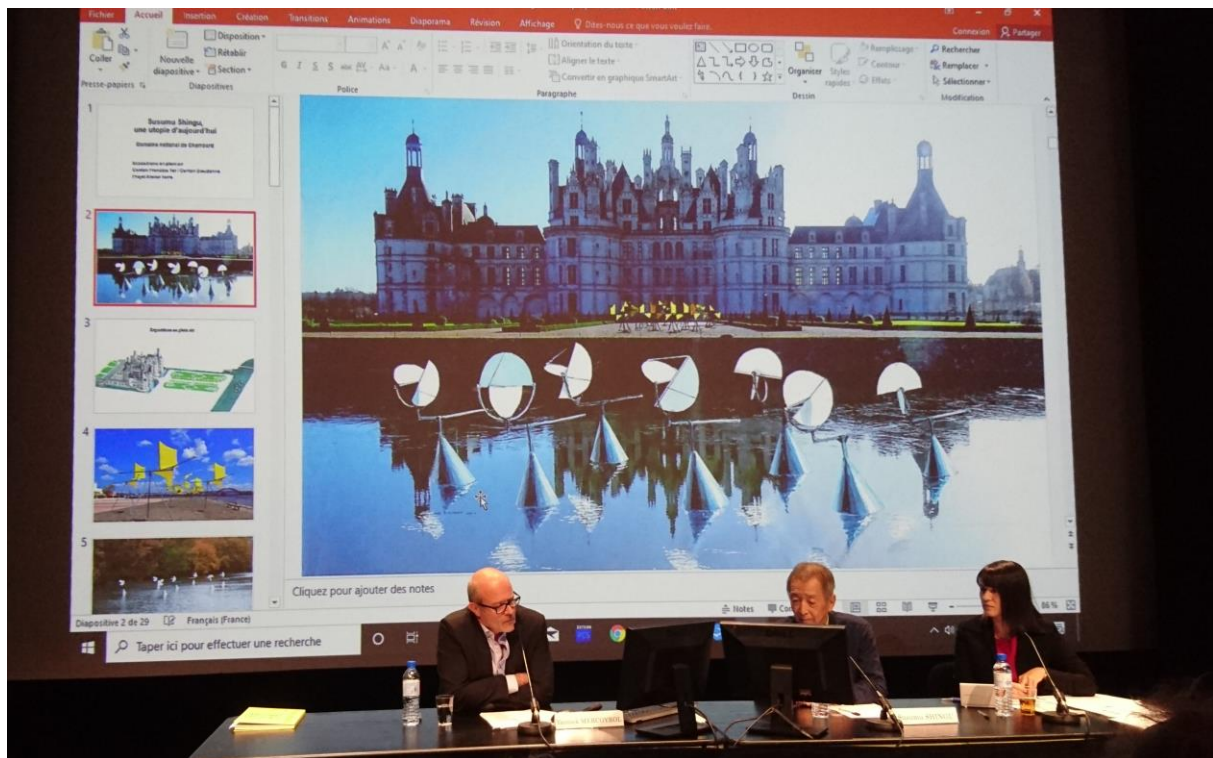
また、2019 年 10 月 6 日（日）から 2020 年 3 月 15 日（日）まで、フランソワ 1 世の治下に建設が始まったシャンボール城で、「日本のダビンチ」とも呼ばれる芸術家・新宮晋さんの風と水をテーマにした動く彫刻の展示が始まりました。パリ日本文化会館では同展に先立ち、新宮さんとシャンボール城の文化事業・文化遺産部長で同展のコミッショナーでもあるヤニック・メルコワールさんによる対談が開催されました。

対談のテーマは「ユートピアについての対話」です。新宮さんは、ご自分の作品が展示されている場所のスライドを見せながら次のように語りました。

「子供の気持ちのまま 82 歳になった。大人の気持ちはわからないはまだ。ダニエル・ダuncanの写真集にミロが刷りたてのリトグラフを見ている写真があるが、その姿に非常に芸術家としての姿を見た。これまで地球という星のエレメントである水や空気の流れをテーマにずっと楽しんで制作してきている。いまだに新しい発見がある。また、制作する際にはその場所に合った作品を考え、単なる飾りではない作品を心がけている。カルダーに似ているといわれるが、常に新しいものを求めたミロにより親近感を覚える。動くものは人間の心の中にある。私には動かないものの方が不自然に見える。

「2000年から2002年にかけて風のキャラバン21という企画で世界の僻地で作品を展示した。例えばマオリ族がたどり着いたというオークランドの沖の島での展示など。まだ自然とともに生きている人たちがいる。人類の未来を考えると彼らから学べるのではないかな？そのキャラバンで展示した作品もシャンボールに展示する。この自然界と人間との間にできる境界線は永遠の私のテーマです。

「私はどちらかというとダビンチが嫌いだった。しかし、ローマで絵画を学び、それから立体に進み、動くものをつくるようになってダビンチに親近感を覚えるようになった。今回の展示会のために、9月16日からシャンボールに住まわせてもらっているが、部屋の中でダビンチが話しかけてきた。その対話からインスピレーションを受けてデッサンをした。



シャンボール城に展示する作品について解説する新宮晋さん

「この年齢になると、分野の違うアーティスト、地球の未来を心配しているアーティストと一緒に仕事をしたいと思っている。アートはいまや一人でやるものではない。『アトリエ・アース・プロジェクト』では世界に発信できるものが生まれるよう若い人たちとがんばっている。アートの力で未来を明るくする方法を考えたい。」

最後に行われた質疑応答の際に、木寺昌人駐仏日本大使が「シャンボール城でダビンチと対話した際、ダビンチは何と言っていましたか？」と質問したところ、新宮さんは「おまえ、そんな解ける謎みたいなものを作るな、謎を残すのがコツだ、と言われた。500年後に残るものをつくりたい。」と返事をし、聴衆の拍手を誘いました。

④ 公演「阿波人形浄瑠璃」

パリ日本文化会館では本願寺文化興隆財団との共催により、9月24日(火)18時半から地上階にある小ホールで、徳島県に古くから継承され、日本の重要無形民俗文化財に指定されている阿波人形浄瑠璃を上演しました。

最初に「襖からくり」のデジタル作品を上映の後、実際の人形を使った阿波人形浄瑠璃の解説とデモンストレーションを行い、続いて「式三番叟」と「戎舞」、「壺坂観音霊験記 沢市内の段」の公演を実施しました。演じたのは新居和昇さん(太夫)と竹本友和嘉さん(三味線)、勝浦座(人形)の方々です。

阿波人形浄瑠璃は、2009年にユネスコにより世界の無形文化遺産に登録された文楽の起源とも言われており、文楽の芸術的味わいと庶民的な素朴さを兼ね備えたものです。人形のサイズは文楽のものより若干大きいように見えました。

人形浄瑠璃を知らない人が多いなかで、背景に使われる「襖からくり」を4K映像でデジタル処理し、次々に場面を展開していく様子は見応えがありましたし、人形を3人で操る役割分担としぐさの説明もわかりやすいものでした。

演目はお馴染みのものですが、特に「戎舞」の調子の良い唄と人形使いのしぐさを見ると、唄に合わせて思わず身体をゆすりたくなり、ほのぼのとしたのどかさを感じました。



「襖からくり」を背景にした阿波人形浄瑠璃「戎舞」のワンシーン

⑤ 公演「鏡仙会 2019 欧州能ツアー 能・狂言公演」

9月24日(火)20時、「阿波人形浄瑠璃」が終演してすぐに、地下3階の大ホールで「鏡仙会 2019 欧州能ツアー」の一環として新作能『ヤコブの井戸』の公演が始まりました。

この『ヤコブの井戸』を演出しているシテ役の能楽師清水寛二さんは、伝統芸能としての能の継承・普及に尽力するとともに、現代の諸問題を扱う新作能の創作にも力を入れています。本作は、知日家で日本美術の専門家でもある喫日協会のディートハルト・レオポルドさんが書いた台本をもとに、数年にわたる二人の対話を通じて完成したものです。

二人のユダヤ人がヤコブの井戸でパレスチナ人の老女に出会います。彼女は毎日その井戸に水を汲みに来ますが、水が枯れていて空の容器のまま帰ることを繰り返しています。老女はユダヤ人に対して、昔サマリア人にこの井戸で水を分け与えたユダヤ人男性の話をして聞かせます。二人のユダヤ人はその話を聞いて心を開き、老女に優しい言葉をかけます。すると老女は若返り、井戸にも水が溢れ出して、女は器を水で満たして帰っていく、という物語です。

対立する二つの民族が砂漠で一つの井戸の水を分け合うという新約聖書ヨハネの福音書の物語を題材にし、能の形式を忠実に守りながら、現代が抱える深刻な課題の解決には“寛容さ”が大切なこと、憎み合いからは平和は訪れないこと、お互いに存在を認め合い、思いやりを抱くようになって初めて平和が訪れること、を訴えています。心に響く熱演に観衆は拍手喝采で応えました。



『ヤコブの井戸』出演者による終演後の記念撮影(前列一番右が観世鏡之丞さん、後列右から4人目が清水寛二さん)

その後、小笠原匡さん弘晃さん父子による狂言『伯母ケ酒』と、観世鏡之丞さんによる伝統能『天鼓』の素晴らしい公演がありました。また、翌25日(水)には原爆による長崎の悲劇を題材に、世界平和と魂の救済を描いた能『長崎の聖母』が上演されましたが、筆者は所用で拝見することができませんでした。

◎ RATP の「ラグビーステーション」事業に協力

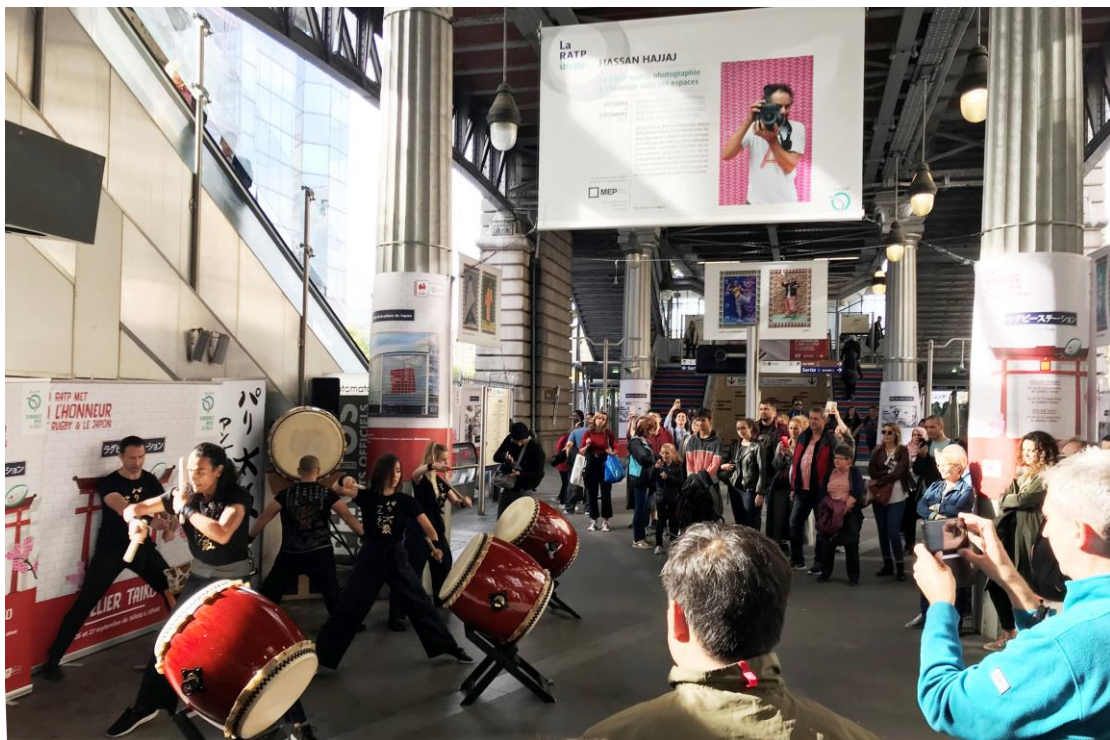
パリ日本文化会館では外部機関との連携も強化しています。その一環として、ラグビー・フランス代表チームのパートナー企業であり、パリのメトロ・バス等を運営しているパリ交通公団 (RATP) の「ラグビーステーション」というイベントに協力しました。これは、RATP が日本で開催中のラグビー・ワールドカップを盛り上げるために企画したものです。具体的には、RATP は日本関連では以下のイベントを行い、当館は太鼓グループやワークショップ講師の紹介を行いました。

- ① パリ・タイコ・アンサンブルによる和太鼓演奏、赤・白・青の折紙で雄鶏を折るワークショップ (ビルアケム駅構内、9月24日 (火) ~27日 (金))
- ② 通行人の名前を毛筆でカタカナで書くデモンストレーション (サンラザール駅構内、10月1日 (火) ~10月4日 (金))

その様子は、日テレやTBSなど、日本のメディアでも報道されました。

<http://www.news24.jp/sp/articles/2019/09/28/10506960.html>参照

また、これに先立ち、6月に当館でRATPの記者会見を行いました。事後にはこの枠組みで、「ラグビーステーション」来場者の中から抽選で当選した方々に当館で生け花初心者アトリエを行う予定です。この連携を通じて、RATPは、パリ全域のバスのほぼ1/4に当館で開催中の「大岩オスカル」展のポスターを無償で掲示、またビルアケム駅とサンラザール駅で同展覧会と当館のパネル・ポスターを無償で作成・掲示してくれました。当館の認知度の向上や事業広報に大きく役立ったと思われまます。



ビルアケム駅での催しの様子 (左手の柱にパリ日本文化会館の写真ポスターが見える; 写真: MCJP)

⑦ シラク元フランス共和国大統領の思い出

9月26日(木)にフランス共和国のジャック・シラク元大統領が亡くなりました。30日に行われたパリ6区にあるサンシュルピス教会における国葬には同教会内はもちろん、教会前の広場にも大勢の人たちが詰めかけ、教会の両脇に設置された2台の大モニターを見ながら式典を見守り、別れを惜しみました。各国の報道陣も大勢来ていました。

シラク元大統領は大変親日的で、日本の文化に造詣が深く、パリ日本文化会館とも非常に縁の深い大統領でした。1997年5月13日、清子内親王殿下と並んで当館の開会式でテープカットをされたのを初め、1997年11月29日(土)に「楽」展、1998年11月8日(日)に「縄文」展、2001年秋に「埴輪」展の3つの展覧会にも足を運んでくださいました。現役の大統領に4回も訪問していただけることは当館にとって非常に光栄なことです。私は当時事業部長として会館に出向しておりましたが、開会式、「楽」展、「縄文」展の3回のご訪問に立ち会うことができました。シラク大統領の各展覧会で示された日本文化への関心の高さや知識の深さに都度感銘を受けたことを思い出します。

日本文化への関心の深さを示す逸話としては、例えば「楽」展の際に、当時の磯村館長から「来年の今ごろに縄文展を計画しています」と聞いて、「それはいいアイデアだ。縄文は非常にスペキュタキュレールだ(見応えがある)。その翌年は？」とおっしゃり、同館長が「検討中で、まだ決まっていません」と答えると、大統領は「ぜひ埴輪展をやったらいい」と応じ、実際にその後「埴輪」展開催に至った経緯があります。

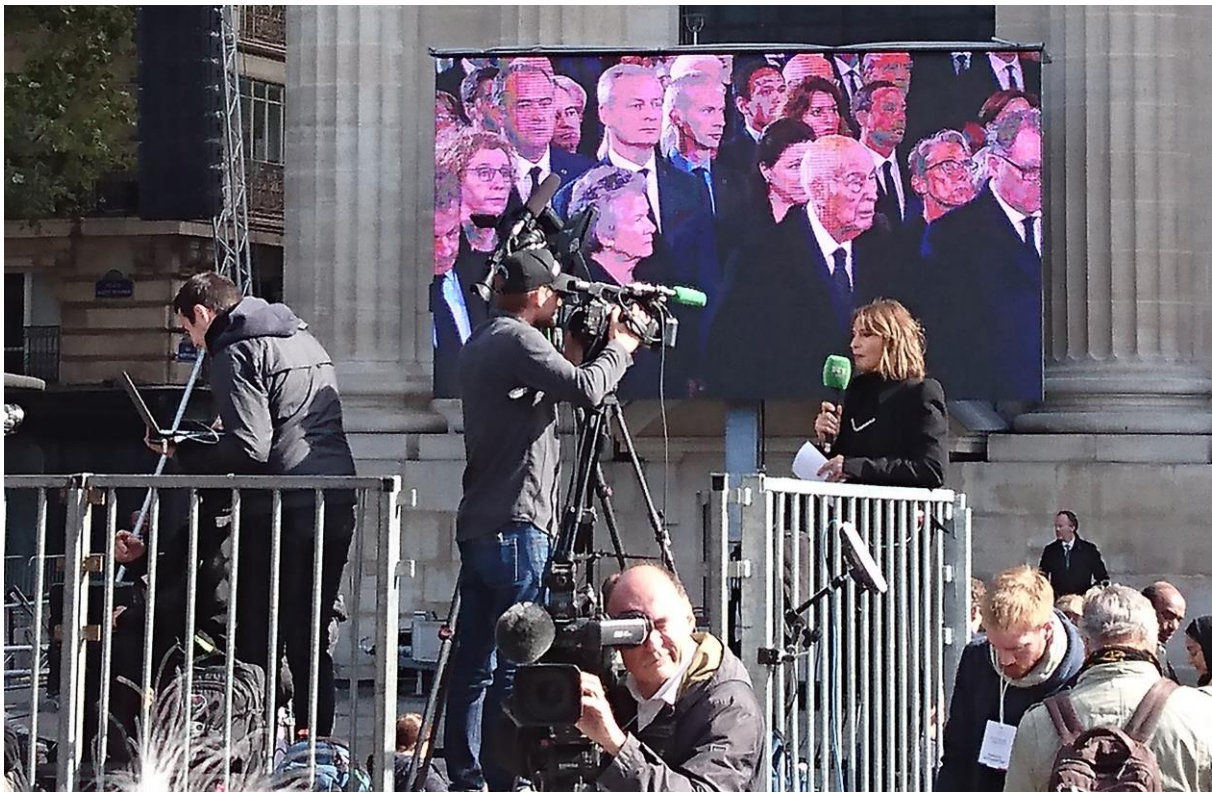


「楽」展を訪れたシラク大統領(1997年11月)

(左から磯村初代館長、松浦駐仏大使、筆者、シラク大統領、清水国立陶器美術館学芸員、石川公使)(写真:熊瀬川紀氏)

また、日本文化への造詣の深さを示す逸話としては、「縄文」展の際に、随行した文化庁の専門家の説明を待たずに土偶や土器の各時代を言い当てたほか、縄文時代に既に初歩的焼畑農耕があったとの説明に対し、「縄文時代に既にコメがあったということはこれまで知られていなかったと聞いているがどうなのか？ 水稻栽培は弥生時代初期からと聞いているが」と応じたりしました。

さらには一部が欠けたランプ土器を見て「一部欠けたところがあるが、あなた（文化庁の専門家）が壊したのでないことは分かっている」とユーモアのセンスもたっぷり持ち合わせていました。



パリ6区サンシュルピス教会のモニター前でシラク元大統領の国葬の様を報道するメディア陣

以上